

日本医療福祉生協連近畿ブロック有志 ボランティアセンター 東日本大震災支援ニュース

NO. 9 2011年5月15日 発行担当 神戸医療生協・森

仮設住宅での個人宅配サービスが始まります

仮設住宅への入居予定者から要望の出ている買い物の利便について、みやぎ生協が個人宅配サービスを開始することになりました。仮設住宅にパンフレットが配布されています。

「組合員になってよかった」引越しの手伝いにて

西垣・黒田チームは岩沼市でデイサービスを運営されている組合員の引越しを手伝い。診療所からは遠い場所でしたが、「医療生協の組合員であることで、いろいろと助けていただける。組合員になってよかった」と喜ばれておりました。

地元ケアマネの奮闘、介護支援の必要な高齢者の実情

11日から15日まで支援に入っていた石川さん（なにわ保健生協）は、保健センターにて高齢者の状況について聞き取り。地元のケアマネジャーの奮闘で、老人保健施設やショートステイなどへの緊急入所が進められるなど、生活の場を保障する努力がされているとのこと。また、この地域は若い世代と同居されている方が多く、孤立される方は少ないようです。

仮設入居が未だ決まらない方の孤立感

坂元中学校避難所にて、仮設住宅が未だ決まらないと言う方の声。「ここは坂元支所避難所に集約されるけど、私たちは津波で流され、避難場所もあちこち流される」「いつ頃に仮設への引越しと言う目標がはっきりしていれば、避難生活にも張りがあるんだけど・・・」と言う声。

坂元駅から東側の海沿いで建築業を営んでいた方は、「潮が満ちれば、土地が海に浸かっている。あの場所に再建は出来ない。商売道具も全部流されたし、もう借金までして商売を再開できない」

真庭公民館避難所にて、「三ヶ月前に亡くなった妻の位牌だけもって逃げた。仮設に入って落ち着いたら仕事を見つけない。墓も流されている。妻の供養と墓をきちんとしたい。」

仮設がまだ決まっていない人のなかに孤立感が広がっています。

14日、尼崎医療生協から18名の支援



14日早朝に尼崎医療生協の支援チームが坂元中学避難所に到着、現地チームと合流し午前中は坂元地区で泥だし。7年前の台風23号でのたじま医療生協支援の経験のある職員も多く、住宅の泥出しはてきぱきと進められ、予定より早く作業が完了しました。森（神戸医療生協）の案内で真庭にある犠牲者が土葬されている墓地を見学。未だ身元不明のまま「震災物故者 一」と書かれた墓標に言葉を失い、黙って手を合わされていました。

午後は花釜区で片付けや泥出しなどを行っています。力のある男性陣はスコップや一輪車で一斉に泥出しや瓦礫を

運び、女性陣は細かい部分を丁寧に清掃しました。10歳の男の子も泥を運んだり、大人に負けないくらい大奮闘。計4軒のお宅の清掃を行いました。

他のボランティアチームの姿も数多く見受けられましたが、聞き取りを行うとまだまだニーズは数多くあります。この区域は今後、居住可能区域になるか禁止区域になるか国・自治体の方針は定まっておらず、泥出しを行ったお宅からは「もしかしたらボランティアのみなさんの努力が無駄になるかも・・・」と不安の声もありました。



物資支援に歓迎の声

14日、尼崎医療生協の支援チームが花釜区から撤収後、プロの三味線奏者の方が衣類など支援物資を持って現れました。最初のご近所の数名のみだったのが口コミで人が集まりだし、30軒以上の方が物資を持って帰られました。集まってきた方にお話を伺うと「このあたりでの物資支援は初めて」と言う声もあり、まだまだ物資支援のニーズがあることが分かりました。



西垣さん・石川さん疲れ様でした

一ヶ月にわたる長期支援に入られていた西垣さん（たじま医療生協）が14日朝、現地を離れ兵庫県へと帰られました。地元の方々の中にしっかりと溶け込み、被災者の方々や県南医療生協の職員からも別れを惜しむ声が数多く出されました。13日夜には槻木事務所で県南医療生協の常務理事会有志による手作りの送別会が行われ、最後の交流が深夜まで続きました。15日夕方には石川さん（なにわ保健生協）が大阪に戻られました。「屈強な男性職員が来る」との前評判どおり、力仕事で大きな役割を發揮しました。

代わって14日には、なにわ保健生協から介護福祉士の竹島さんが到着しました。15日には森と交代の現地責任者としてヘルスコープ大阪の白井さんが到着しました。

